

## 44 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業の報告 ー職業訓練における小グループ訓練と個別指導ー

自立支援局 小林菜摘 高橋陽子 柴崎今日子  
四ノ宮美恵子 水村慎也 植木朋子 遠藤明宏  
病院 深津玲子 車谷洋

### 1. はじめに

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業において、就労を目的とした支援として職業訓練を実施した。ここでは、特に小グループ訓練と個別指導を組み合わせた支援について報告する。

### 2. 目的と対象

青年期発達障害者における、一般就労を目標とした効果的な職業訓練（社会的なマナーの理解や社会人としてのルールの学習を含む）の方法を検討することが目的である。

対象者はモデル事業利用者の3名でいずれも広汎性発達障害との診断を受けた者である。

### 3. 訓練内容

小グループ訓練として、自立支援局支援業務室が担当する業務から切り出してもらった、郵便物に関する一連の作業を再構築した「郵便配達作業訓練」と、データ入力や消耗品倉庫の管理等の複数の作業を組み合わせた「事務補助作業訓練」を設定した。「郵便配達作業訓練」はルーチンワークを中心に、コミュニケーションを必要とする課題を多く取り入れた。「事務補助作業訓練」では多様な作業の組合せを中心に、状況判断を必要とする課題を多く取り入れた。訓練時間帯は、午後の1時から3時の約2時間、基本的に毎日各作業に適宜振り分けて行った。

個別指導は小グループ訓練に並行して、週に1～2時間程度実施した。個別指導では、主に小グループ訓練で経験したことの意味づけや経験内容の整理、小グループ訓練の中で顕在化した課題に関しての指導や話し合いを行った。

### 4. 経過

初期は個々人の課題について個別指導し、その内容を小グループ訓練で実践するという方法で行った。挨拶等の基本的な職業態度は身についたが、コミュニケーションや状況判断等を必要とする課題の指導効果は得られなかった。初期の反省から、中期は小グループ訓練で顕在化した課題について個別指導し、再び小グループ訓練で実践するという方法で行った。結果、コミュニケーション及び状況判断に関して指導効果が得られ、他の状況下でも一部において般化が見られた。

### 5. 考察

小グループ訓練を行う効果として、現実に近いゆるやかな構造化の場面から個人の課題の抽出ができる点と、他者のモデリングによるスキルの獲得、相互交流から生じる気づきが見られた。しかし、小グループ訓練のみで個別指導を行わないと、自己の課題理解のみにとどまり、課題への対処法の学習に至らなかった。並行して個別指導を取り入れることで自己の課題理解と、個人の特性を踏まえた対処法の学習場面の設定との双方が行われ、効果が生じたと推測された。